



現代英語および現代ドイツ語における存在構文の成立条件について : 言語コーパスに基づく分析を手掛かりとして

今道, 晴彦

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2007-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲3865

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003865>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 2 3 4 】

氏 名・（本 籍） 今道 晴彦 （ 滋賀県 ）

博士の専攻分野の名称 博士（学術）

学 位 記 番 号 博い第639号

学位授与の 要 件 学位規則第5条第1項該当

学位授与の 日 付 平成19年3月25日

【 学位論文題目 】

現代英語および現代ドイツ語における存在構文の成立条件
について ―言語コーパスに基づく分析を手掛かりとして―

審 査 委 員

主 査 教 授 湯浅 英男
教 授 中川 正之
教 授 林 博司
教 授 定延 利之
助教授 石川 慎一郎

論文内容の要旨

氏名 今道 晴彦

専攻 コミュニケーション科学専攻

指導教員氏名 湯浅 英男

論文題目

現代英語および現代ドイツ語における存在構文の成立条件について
—言語コーパスに基づく分析を手掛かりとして—

論文要旨

本論文の目的は、現代英語および現代ドイツ語の「存在構文」と呼ばれる構文の成立条件を探ることにより、その際どのような要因が決定的な役割を果たしているのかを明らかにすることにある。また、同時に、その分析によって抽出された要因が、当該構文においてのみ当てはまるものではなく、周辺構文にも及んでいることを指摘することで、構文間の連続的関係を提案することを目的としている。ここで言う周辺構文とは、いわゆる「非人称構文（「述定文」）」と「人称構文（「主題文」）」のことであり、本論では、当該構文が両構文を極にした連続体の中に位置することを主張する。このことは、通常の規範的な構文である人称構文から逸脱するとして、これまで特殊なものとして取り扱われてきた非人称構文との間に関連を見出すこととなり、また、現代ドイツ語に特異な現象として報告されている、いわゆる虚辞の出没現象についても、新たなアプローチの可能性をも志向するものである。

多くの文法書や概説書において、存在構文が取り扱われる場合、一般的な特徴として、冠詞類を使用する際にある制約が認められることが指摘される。その制約とは、当該構文においては、意味上の主語として不定の名詞句が選択され、定的な定名詞句は容認されないというものである。それは、談話ないし情報構造の観点から見た時に、当該構文が新情

報を導入する際の表現形式であると考えられるためであり、したがって、旧情報を担うような定冠詞を伴う名詞句などは容認されず、新情報の不定名詞句が出現すると考えられている。

本論は、存在構文の成立に関するこうした冠詞類の定性、不定性の制約に加えて、別の制約が関係していることを主張するものである。すなわち、不定冠詞か、定冠詞かという制約に加え、後続の名詞句そのものが意味的に具体的か否かという問題が、存在構文の成立に大きく関係している点を指摘し、その程度に応じて、存在構文が非人称構文と人称構文を極にした連続体の中に位置する構文であることを提案する。

第1章では、まず本論で扱う現代英語および現代ドイツ語の存在構文を概観し、存在を言語的に捉える際の言語形式として、それぞれ「there 存在文」と「es gibt 構文」が選択されることを確認する。いずれの構文においても、不定冠詞が生起するのが一般的ではあるが、他方で、定冠詞の出現が認められることも指摘されており、現代英語を例にとれば、「非前方照応的な用法」と「リスト文 (list-sentence)」が報告されている。

そこで、なぜ上記の用法において定冠詞の出現が容認されるのかという問題を考察するにあたって、中村 (1980) および Bolinger (1977) の分析を概観する。中村 (1980) では、リスト文で出現する定名詞句は、既知であり、前方照応的であるが、意味の上では、不定的であって、かつ、リスト文ではそれを修飾する埋め込み文が省略されていると考えることによって、当該構文は、非前方照応的な用法と同一直線上にある用例であると考えられた。また、Bolinger (1977) においても、場面設定という説明装置が提案されることで、非前方照応的な定名詞句と前方照応的なリスト文を含めた当該構文の統一的説明が試みられた。

本論では、非前方照応的な用法とリスト文を同一の性質のもとして扱うか否かという以上の問題に関して、連続体説をとり、当該の存在構文では、定名詞句であっても容認されると主張する。加えて、非前方照応的な用法とリスト文では、前者においては抽象的な名詞句が出現するのに対し、後者においては具体的な名詞句が出現していることから、容認される冠詞類のみならず、語彙のクラスにおいても意味のレベルで何らかの制約が働いているのではないかという提案をし、そのことを確かめるにあたってコーパスを利用した量的な観点からのアプローチの意義を唱える。

そこで第2章では、バランスのとれたイギリス英語データベースである BNC (British National Corpus) を用いて、現代英語の there 存在文における名詞句の意味的特徴の一端

を明らかにすることを目指す。それにあたって、まず冠詞類と、それと共に起する名詞句の用例および頻度の検索を行うと同時に、あわせて名詞句の単複の違いや、動詞の時制や数の違いにも着目し、データの収集と検証を行う。

まず、先行研究において指摘されている通り、冠詞類はその多くが不定冠詞によって占められる点が挙げられる。しかしまた、定冠詞の出現もわずかながら認められ、動詞の時制および数を変え、また縮約によって、その割合が増えるという現象が確認される。

しかし、その不定性、不確定性は、不定冠詞の付加によるだけではなく、名詞句そのものの選択においても徹底されている。すなわち、両言語において容認された名詞句の多くは、具体的というよりは、抽象性の高い名詞句ばかりであることを確認する。

また、具体性の高い名詞句の出現パターンにおいても、動詞の時制を現在から過去に、また動詞の数を単数から複数に変えることによって、さらには、通常の基本形から縮約形にすることで、具体性の高い名詞句の出現が認められ、その具体性の高い名詞句の多くが複数名詞として生起することが確認される。このことから、当該構文においては、冠詞類による文法的定性以上に、名詞句が意味的に抽象的か具体的かという基準が、その成立にとって決定的な要因となっていることを確認する。

以上のことから、当該構文においては、不定性、不確定性が基本的に求められており、それにもかかわらず定冠詞や具体性の高い名詞句が容認されたのは、その定性を弱めるための手段が講じられたためであると結論づける。つまり、動詞の時制や数、また名詞の数を変えることが定性を弱めるための手段となり、これらは Bolinger (1977) の唱える場面設定に加えられる更なる手段であることを主張する。

続いて、第 3 章においては、ドイツのマンハイム国語研究所が提供するコーパスデータベースである COSMAS II のなかの書き言葉アーカイブを利用して、姉妹言語である現代ドイツ語において、同様のことが指摘できるか否かを確認する。

まず、当該言語においても同様に、文法的に定的でない不定の冠詞類が主として用いられるものの、動詞の時制や数を変え、さらには縮約という操作を施すことで、定冠詞の出現数が増えるという傾向が認められる。

また、具体性の高い名詞句の出現パターンにおいては、当該言語の場合、冠詞類の有無が、その出現を決定する要因となっており、動詞の時制や数の違いにかかわらず、とりわけ、無冠詞のときに具体性の高い名詞句がまとまって出現するという結果が導出され、言語間に看取される個別性が指摘される。両言語においてこのような違いが認められる要因

としては、現代英語が、類型論的に見た場合、配列型言語に分類されるのに対し、現代ドイツ語が格標示型言語に相当することからくる言語構造の違いによるためであると結論づける。

ただし、当該言語においても、出現が認められた具体性の高い名詞句の多くが複数名詞であることから、その具体性を緩和するための場面設定がなされていると主張する。

名詞が具体的か否かの明確な線引きは困難である。むしろ、それは程度問題であって、抽象的なものと具体的なものを極にして連続していると考えの方が適切である。それゆえ、定性（文法的定性、意味的定性）の違いを反映する当該の存在構文も、定、不定を極とする連続体の中で捉えられる必要がある。上述のように、場面設定を施すことによって具体性の高い名詞句が認められたが、まさにそれは、当該構文がこうした連続体の中に位置しているためであると考えられる。また、there 存在文において動詞と一致しない複数名詞の出現が認められたことや、主格で生起しない人称名詞が容認されたことも、同じように、当該構文が連続体の中に位置する構文であることを示唆していると考えられる。

以上のコーパス分析を踏まえて、最後の第 4 章では、総括を行う。存在構文の成立条件を考察する際には、冠詞類の違いだけではなく、出現する名詞句そのものの意味的性質も視野に入れる必要があることを確認し、談話レベルにおいて聞き手が話し手の発話のどのように受け止めるかということに応じて、場面設定がなされることで、定名詞句や具体性の高い名詞句が認められると主張する。

また、両言語の存在構文の成立をつかさどるパラメータとして確認された意味的定性が、これまで独立したものとして個別に扱われてきた非人称構文と人称構文の連続性の問題や、現代ドイツ語において認められる 3 人称代名詞の出没に関する問題を解くにあたっての手掛かりとなり、それに伴って、類型論的な考察の地平を開くきっかけになると思われる。

最後に、今回のコーパス分析によって得られた知見から、従来の語法研究や、EFL 教育および DaF 教育において意識されてこなかった問題点を指摘することで、幾つかの提案を行う。

論文審査の結果の要旨

氏 名	今 道 晴 彦		
論文題目	現代英語および現代ドイツ語における存在構文の成立条件について 一言語コーパスに基づく分析を手掛かりとして一		
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教 授	湯 浅 英 男
	副 査	教 授	中 川 正 之
	副 査	教 授	林 博 司
	副 査	教 授	定 延 利 之
	副 査	助教授	石 川 慎 一 郎
要 旨			
本審査委員会は、今道晴彦氏の提出した「現代英語および現代ドイツ語における存在構文の成立条件について一言語コーパスに基づく分析を手掛かりとして一」について審査し、以下の結果を得た。 本論文は、英語及びドイツ語の存在構文を、イギリス及びドイツで作成された言語コーパスを用いて分析し、共起する名詞の文法的意味的特徴を抽出すると共に、その原因を認知的文法的に解明したものである。 第1章では、英語・ドイツ語の存在構文を概観し、英語においてはhave存在文、be動詞と場所句を伴う提示文、there存在文の情報伝達上の差異を過去の先行研究に依拠しながら検証すると共に、ドイツ語においては典型的な非人称存在構文「es+gibt+名詞句」のゲルマン語内部での類型論的及び歴史的立場を明確にした。さらに英語存在構文を手掛かりに、それと共起する名詞句が不定冠詞・無冠詞などを伴う不定名詞句に限らないことを、Bolinger(1977)や中村(1980)に基づいて非前方照応的用法やリスト文を用い説明し、名詞自体の意味的性質の違いが存在構文にとって決定的要因となる可能性があることを指摘している。			

第2章では、英語のコーパスであるBNC(British National Corpus)を用い、「there+is+名詞句」という存在構文について、動詞の単数・複数の違い、現在形・過去形の違い、基本形・縮約形の違いをも視野に入れつつ分析する。共起する名詞の単・複の差異や意味的特徴、冠詞の有無と種類を出現頻度の側面から明らかにし、当該存在構文の様々な特徴を確認している。第一に、「there is」と共起する不定冠詞付き名詞は、上位100位までをとっても1例を除き具体的なものを表わす名詞は出現せず、すべてneed, evidenceなどの抽象名詞であることが明らかにされる。それと同時に、時制を過去に変えたり、名詞を複数形にしたり、縮約形のthere'sに変えることで、具体的名詞の出現頻度が上昇する事実も説得力をもって指摘した。また縮約形there'sでは基本形と比べ、不定冠詞の出現が10パーセント弱減ると共に、定冠詞の出現が増える事実も確認する。さらに縮約形there'sと「数」で一致しない名詞複数形との共起が基本形と比べ増加するなど、縮約形の持つ顕著な文法的立場も実証している。上記の英語存在構文の特徴については、抽象名詞や名詞の複数形のもつ不特定の性格を認知的に解明することや、過去形のもつ「今・ここ」を離れた意味的側面、さらには縮約形と共起する名詞句の述語的性格に依拠しつつ理論的にその原因を究明しようと試みている。

第3章では、ドイツ語研究所が開放しているコーパスを用い、ドイツ語の典型的な非人称構文「es+gibt+名詞句」を、英語同様に時制や縮約形gibt'sも考察対象に入れながら分析している。ドイツ語においては英語に比べ不定冠詞の出現が減少し、無冠詞や定冠詞の出現が増加することや、英語同様、抽象名詞が大半を占めるが、具体的な名詞は無冠詞・複数形の箇所に集中していること、また縮約形では定冠詞が不定冠詞の4倍までに増加するといった文法的特徴が明らかにされる。これらの現象は英語同様に複数形のもつ認知的性格や、ドイツ語の屈折的類型論的特質から原因が究明されている。

第4章では、英語・ドイツ語の存在構文の特質がまとめられると共に、存在構文に関わる名詞の不定性・不確定性が冠詞にのみ抛らず、名詞の指示内容や単・複の区別など名詞の意味論的性格に拠っていることが明確にされる。同時に、英語・ドイツ語の存在構文のプロトタイプを提示することで、言語教育の側面に対しても十分な貢献を果たしていると言える。

本論文の内容を完成させるまでの間、今道氏は「There存在文における定性と不定性の関わりーBNCに基づく分析を手掛かりとして一」（言語文化学会『言語文化学会論叢』第27号、pp.67-82、平成18年10月、レフェリー有り）を公表すると共に、自らが第1筆者となって「縮約がもたらす構文の意味的・機能的変化一言語コーパスに基づくthere is / there's構文の研究一」（神戸大学国際コミュニケーションセンター『国際コミュニケーションセンター論集』第3号、石川慎一郎氏と共著、平成19年3月発行予定、採択通知書有り）を執筆し、博士論文執筆の基本的条件は満たしている。

本研究は、英語及びドイツ語の存在構文をコーパス言語学の手法を用いて定量的かつ理論的に研究したものであり、この分野で重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。よって本委員会は、今道晴彦氏は博士（学位）の学位を得る資格があると認める。